

マルチモーダル批判的ディスコース分析
—理論・方法・課題—

Multimodal Critical Discourse Analysis: Theory, Method, Task

呉 程穗

Wu Chengsui

マルチモーダル批判的ディスコース分析

—理論・方法・課題—

長崎大学 呉 程穂

Multimodal Critical Discourse Analysis: Theory, Method, Task

Wu Chengsui (Nagasaki University)

Abstract

This article begins with the dialogue between critical discourse analysis (CDA) and multimodal discourse analysis (MDA). It then explores the research approach of multimodal critical discourse analysis (MCDA) which is different from multimodal semiotics, and discusses the core concepts of MCDA, introducing a social and affordance-driven approach of multimodal critical discourse and critical visual analysis. Based on the results of the analysis, a hypothetical model of MCDA for media has been proposed. As an emerging field of research, MCDA has the potential to explore in the construction of method system, the relationship between modalities and the relationship between symbolic form meaning expression, the analysis of cultural context.

Key Words: critical discourse analysis, multimodal discourse analysis, multimodal critical discourse analysis

目次

1. はじめに
2. CDA と MDA の対話
3. MCDA へのアプローチ
 - 3.1 マルチモーダル記号論から MCDA へ
 - 3.2 社会的アフォーダンスに基づくアプローチ
4. MCDA の方法論的検討
 - 4.1 批判的視覚分析
 - 4.2 映像メディアに対する MCDA の模索
5. おわりに

1. はじめに

批判的ディスコース分析 (critical discourse analysis¹、以降 CDA と略記する) とは、ディスコースの中に埋め込まれた支配的イデオロギー、差別や支配といった不平等な権力の可視化を目的とするディスコース分析研究のことである。すなわち CDA は、「権力者がどのようにして自分自身の利益のために社会的実践を再文脈化し、イデオロギーに対する支配を維持しよう²」(Machin 2016 : 323) とするのかを明らかにする。デジタル技術にもとづく情報革新によって、CDA は言語という単一モードに分析が限定されていたモノモダリティの分析から、画像と言語といった複合的なモードによって編成されたテキストを分析するマルチモーダル批判的ディスコース分析 (multimodal critical discourse analysis、以降 MCDA と略記する) へと進化してきた (e.g., Chouliaraki 2006 ; 伊藤編 2006 ; O'Halloran 2004)。しかし、MCDA に関する研究の数は相対的に限定的であり、「未だに明確な学問的アイデンティティを持っていない」(van Leeuwen 2012 : 1)。本稿では、CDA とマルチモーダルディスコース分析 (multimodal discourse analysis、以降 MDA と略記する) をつなぐ理路、MCDA への展開、MCDA の方法論、今後の方法的課題などを含め、MCDA に関する研究史を確認する。これによって、映像メディアにおける言語と画像という 2 つの異なるモードの組み合わせに対する MCDA の可能性を提示する。

2. CDA と MDA の対話

1990年代以降、ディスコース研究において、MDA と CDA という 2 つの重要な方向性が生まれた。MDA は、雑誌や漫画などの分野で活用されており、「種々のコミュニケーションのモードとメディアが有する、意味形成の潜在性、それらの実際の使われ方、それら間の動的な相互作用、およびそれらが機能している社会文化的文脈との相互作用を探索する」(Djonov and Zhao 2014 : 1)。他方、CDA は言語学的分析に基づいており、新聞や広告などのマスメディアから教育言説研究まで幅広い分野で活用されている。その核心は

¹ discourse は、言語学者の間では、「談話」、社会学者の間では、「言説」と通常訳されているが、本稿では、「ディスコース」と表記する。桜井哲夫の立てた「あるディスコースが作り出されるのはどのような社会的文脈によるものなのか」(桜井 1996 : 194) という問いを筆者も共有している。

² 本稿における英語および中国語の文献からの引用は、すべて筆者の責任において訳出した。

批判的視角にあり、CDAは「社会的な権力支配の(再)生産における談話の役割に焦点をあてた」(野呂2001:17)。ただし従来のCDAは、言語を中心としたモノモーダルな分析にとどまっている。

CDAとMDAでは研究の焦点が異なるが、両者はさまざまな面で高い同質性を有している。CDAとMDAはともに、一つの体系ではなく、理論的基礎と研究方法において多様性を持つ。Christopher Hartは、MDAとの組み合わせにより、CDAの研究内容と研究対象に広がりが見られるため、「マルチモダリティからの洞察を言語の(批判的な)研究に振り向けることは可能であり、またそうすべきである」(Hart 2016:336)と主張している。同様にEmilia DjonovとSumin Zhaoは、MDAが「一般的な批判的社会理論、特にCDAとの対話に参加することを通し、マルチモーダルな研究分野を発展させる」(Djonov and Zhao 2014:1)と述べる。MDAの研究範囲は複数の記号資源をカバーしているがゆえに、CDAとの融合はその視角の拡大と深化を意味するのである。

CDAとMDAを通し、人間のコミュニケーションの過程における意味生成がマルチモーダルな手段によって実現されていることが解明される。DjonovとZhaoは、CDAとMDAによって、種々のモードとメディアからの選択と、空間、時間あるいは両方の論理による選択が結びつく過程で生じる意味形成が可視化されると述べる(Djonov and Zhao 2014:1)。さらにCDAとMDAはいずれも、記号の意味がある特定の社会的文脈において生まれ、その影響を受けると同時に反作用を及ぼすと主張する。

以上をふまえ、Hartは認知言語学の視点から、CDAとMDAの間の関連性について詳論している。彼によれば、「言語の理解には、マルチモーダルな心的表象の構築が含まれている」(Hart 2016:335)。言語の使用はダイナミックな「概念化(conceptualisation)」(Hart 2016:338)の共同構築という側面を持つ。これは、言葉で表象される物事を間主観的な精神的経験として構成し、ディスコースに意味を与える。すなわち、言語が生み出す意味は、マルチモーダルな心的表象を含んでおり、単一モダリティの「命題的構造(propositional structures)」(Hart 2016:338)のみによってコード化されるわけではない。概念化には、「イメージのシェーマ的表象(image schematic representation)³」と「豊かなシミュレーション(enriched simulation)」という2つ表象レベルが含まれている(Hart 2016:338)。イメージのシェーマ的な表象のレベルにおいて、テキストによって提示され

³ schemaとは、主体の関心にもとづく見取り図としての図像のことである。

る文法構造が、従来の概念上の対応物呼び出し、人々がコミュニケーションの対象としているターゲットシーンに対する基本的な理解を形成する。批判的な観点からすれば、イメージのシェーマ的な表象は「より広いパターンの信念、価値観とディスコースを反映することができる」(Hart 2016: 338)。豊かなシミュレーションのレベルにおいては、言語によって、相手が記述している状況の経験的(知覚的および行動的)シミュレーションを構築するための一連のヒントが提供される。したがって、人間の心におけるターゲットシーンの時空間的な展開に伴い、意味が徐々に生成する。つまり、視覚的な基盤を持っているがゆえに、「言語によって呼び起こされる意味は、まさしく MDA で研究されてきた潜在的な社会的記号機能が持つ特質であるマルチモーダルな情報をエンコードしている」(Hart 2016: 340)。このような点から、CDA と MDA の間には十分に対話の余地があることがわかる。

3. MCDA へのアプローチ

3.1 マルチモーダル記号論から MCDA へ

マルチモーダル記号論(multimodal semiotics)は社会記号論(social semiotics)に由来する。社会記号論は Michael Halliday の選択体系機能言語学(systemic functional linguistics、以降 SFL と略記する)の流れを汲んでいるが、言語とそれが使われるコンテキストが不可分であることを前提とする点に特徴がある。加えて、一つの文において複数の意味が重層的な機能を持つことを強調し、3つのメタ機能から文を分析する。すなわち、内容を伝達する観念構成的機能(ideational function)、参加者の人間関係から生まれる対人関係機能(interpersonal function)、およびそのテキストに一貫性のあるまとまりを付与するテキスト形成的機能(textual function)である(Halliday and Matthiessen 2004)。これを発展させたマルチモーダル記号論は、研究対象を言語から意味を生成しうるすべての記号資源に拡張し、すべてのモードが意味生成の潜在性を持っていることを強調する。大部分のマルチモーダル記号論にもとづく研究は個々のモードにおいて3つのメタ機能がどのように役割を果たしているのかに着目する。

「マルチモダリティへの社会記号論的なアプローチは、他のモダリティに対して言語をモデルとして適用する傾向がある」(McDonald 2013: 318)。マルチモダリティ分析に際して言語学の概念を規範化すると、異なるモダリティにおける表象と意味を説明する際に

制限が加えられ、各モードの非言語的要素が無視されやすい。David Machin はもう一つの問題を指摘している。SFL をマルチモダリティ分析に援用することで記号資源の文法やシステムを明示することはできるが、「より広くて直接的で社会的なコンテキストを無視する」傾向が生まれるのである (Machin 2016 : 326)。

Machin (2013, 2016) と Hart (2016) らは、CDA の理論を援用しつつ、異なるコミュニケーション機能を持つ記号資源がどのように活用される (deployed) のかを分析することによって、CDA と MDA をマルチモダリティ批判的ディスコース分析 (MCDA) へと深化させた。

3.2 社会的アフォーダンスに基づくアプローチ

Machin によると、マルチモダリティの研究は、「断片化されている (fragmented)」 (Machin 2016 : 322)。マルチモダリティの研究分野内では、中心的な研究の方向性が不明確であり、研究者の関心がバラバラである。同時に、研究分野外において、学際的な対話を強化する必要も認められている。しかし、MCDA にとって、「あらゆる形態のコミュニケーションに埋もれている支配的なイデオロギーを明らかにする」 (Machin 2016 : 323) ことが何より重要である。そのため、Machin は、社会的アフォーダンスに基づく (social and affordance⁴-driven) アプローチを主張し、MCDA に新たな道を示した。

Machin は、異なる記号資源にはそれぞれ特定のアフォーダンスが映し出されているため、各モードに記号資源がどのように活用され、それらにおいてどのような差異があるのかを分析するのが重要だと主張する (Machin 2016 : 326)。モダリティ同一化、すなわち異なるモードをイコライザーとして扱う問題について、Machin は、言語学の視点からのマルチモーダル記号論研究が、異なるタイプの記号資源を均質化し、各モダリティの固有の社会文脈とアフォーダンスを無視しがちであると批判する (Machin 2016 : 327)。実際、各モダリティは「独立しており、固有の意味潜在性を持っている」 (張 2018 : 8) ため、人々が異なる文脈において記号資源をどのように選択するのかに違いが生まれる。

Machin は、Louis Hjelmslev と Valentin Nikolaevich Voloshinov の記号論的手法を採用し、MCDA へのアプローチを構築しようとする。Hjelmslev は、人々がどのように記号

⁴ アフォーダンス (affordance) は、アメリカの知覚心理学者 James Jerome Gibson による造語であり、環境が動物に対して与える「意味」のことである。Machin は異なる記号資源にはそれぞれ社会性があり、違った機能と意味を持っていることを強調した。

を使い、まとまりのない精神的や物質的な状態に境界を定めるのに関心を持っており、記号の機能は、さまざまな混沌とした状態間の関係性を解釈し、意味を与えることであると主張する (Machin 2016 : 330)。具体的に言えば、写真、建物、景色などは記号的機能があるがゆえに意味を持つことができる。意識と表現形式の間に強い相関関係があり、それが記号の機能によって実現されるからである。記号の機能は、記号の表現のレベルと内容のレベルをつないでいるだけでなく、それぞれの形式と実体も結合している⁵。そのため、記号の表現と内容、形式と実体は相互に依存し、同じ記号の異なる側面となる。Hjelmslev の枠組みでは、記号のシステムと機能は密接に結ばれ、一体化している。

Voloshinov は、マクロな視点から、記号研究は社会文化、歴史、政治などの要因と組み合わせて実施されるべきだと主張する (Machin 2016 : 330)。MCDA を遂行するには記号資源の社会的属性を考えるのが何より重要である (Machin 2013, 2016)。すなわち、ディスコースが社会的実践を再文脈化する際、特定のモダリティはどのように機能し、支配的イデオロギーの利益にどのように応えるのかが重要である。

Machin はこれと異なるアプローチを取り、社会的アフォーダンス主導の MCDA を提唱している。ここでは、記号論の研究は、モダリティのさまざまな機能およびそれらと関連する社会的、歴史的、文化的要因に注意を払う必要があることが強調される。Machin は MDA と CDA の統合的發展を試みており、既存のマルチモーダル研究が記号のシステムの構築に重きを置きすぎ、社会的文脈とのつながりが背景化するという問題を克服しようとした。これによって CDA 研究は新たな展開を迎えた。

確かに、Hjelmslev と Voloshinov の記号論を MCDA に援用する考え方は革新的であるが、議論の余地はなお少なくない。第一に、Machin が Hjelmslev と Voloshinov に目を向けた最初の意図は、記号論研究における SFL の制限を打ち破ろうとするところにあった。言い方を変えれば、彼は言語学理論の記号論研究に対する影響を低減しようとしている。しかし、厳密に言えば、Hjelmslev と Voloshinov の研究はいずれも言語学の理論に基づいたものであり、そもそも両者の理論が具体的テキストの分析の際に実際に実現できるかどうかは証明されていないのである。第二に、Machin は Hjelmslev と Voloshinov の理論を援用して、記号論の機能性と社会性についてそれぞれ論証しているが、MCDA に両者

⁵ Ferdinand de Saussure と同様、Hjelmslev はシニフィアン (signifier) (意味するもの、記号表現) とシニフィエ (signified) (意味されるもの、記号内容) という 2 つの構成要素から成り立つと見なしている。しかし、Saussure と異なり、彼はこの 2 つの要素をさらに表現形式、表現実体、内容形式、内容実体に細分化する。

をどのように効果的に融合させるのかについて明確には触れていない。第三に、Machin は、Hjelmslev の記号理論の枠組みにおいて、機能とシステムが1つになり、機能が形式と実体をつなげていると主張しているが、その枠組みは純粹理論的なものにとどまっておろ、社会的文脈に欠けている。つまり Hjelmslev が提唱した記号の機能そのものとその理論の応用可能性について、さらに検討する必要がある。

4. MCDA の方法論的検討

4.1 批判的視覚分析

Machin は MCDA へのアプローチについて理論的な提案をしたが、具体的な方法について触れていない。CDA と MDA は、独立した分野であり、比較的成熟した研究ツールと体系的な研究方法を持っている。両者を融合させた MCDA が、それぞれの研究方法を実践に応用できるかどうかを検討する必要がある。

Jiayu Wang (2014) は、MCDA の方法として批判的視覚分析 (critical visual analysis) を提唱した。批判的視覚分析には、ディスコース物語的分析 (discourse narrative analysis)、視覚的間テキスト分析 (visual intertextuality analysis)、批判的視覚メタファー分析 (critical visual metaphoric analysis) という3つのカテゴリーが含まれている。ディスコース物語的分析は、視覚的記述 (visual description)、視覚的解釈 (visual interpretation)、社会文脈の説明 (explanation of social context) という3つの次元が含まれている。視覚的間テキスト分析について、Wang (2014) は Roland Barthes の考えを継承し、間テキスト性のアナロジーで異なったモダリティ間の関連性を重視する。間テキスト概念を視覚研究と融合させることで、より広い視角を持つ概念に拡張することができると主張する (Wang 2014 : 276)。Wang は特に批判的視覚メタファー分析に着目し、画像のカラー、線形、サイズが、その中に含まれているイデオロギーの傾向と深く関係していることを強調する。

Wang が提案した批判的視覚分析は3つの手順に従う：(1)視覚記号のモードを認識する。(2)視覚記号を3つのカテゴリーに分類する。例えば、画像テキストおよびそれと対応する言語テキストによる説明が付いているものをディスコース物語的分析に分類する。口頭の言語テキストに伴う画像の場合、視覚的間テキスト分析に分類する。タブロイドなどに掲載されている画像は批判的視覚メタファー分析に分類する。(3)批判的視覚分析を行う。そ

それぞれ対応する方法でデータを分析し、視覚記号に含まれているイデオロギーを解釈する (Wang 2014 : 281) (図1)。

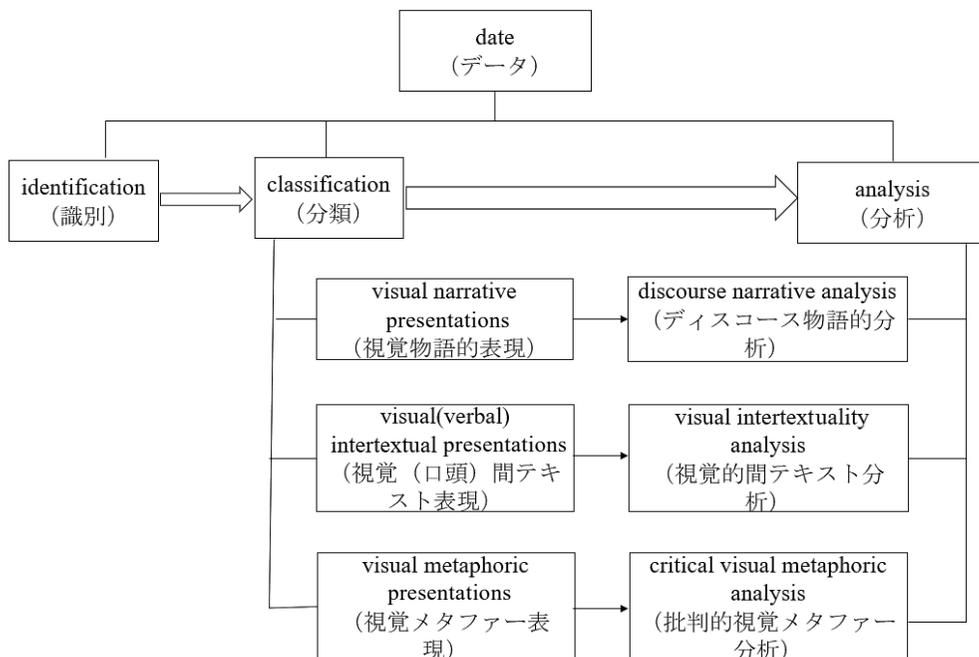


図1 Wangによる批判的視覚分析枠組み (Wang 2014 : 280)

Wangが提案した批判的視覚分析は「実証研究で運用できる」(Wang 2014 : 280) 水準に達しているのみならず、比較的包括的で、広範囲の視覚的記号表現をカバーしているため、MCDAの方法論に新たな展開をもたらした。しかし、ディスコース物語的分析、視覚的間テキスト分析、批判的視覚メタファー分析をどのように統合しシステム化するのか、視覚のモードを認識する(記号データを分類する)際の主観性をどのように回避するのか、言語テキストが付いている視覚的記号表現における言語要素をどのように扱うのかなどの問題について詳細な分析方法は提示されていない。

4.2 映像メディアに対するMCDAの模索

MCDAにおいては、「批判的」が依然としてコアの概念である。それゆえ、ディスコースに含まれている社会・文化における権力関係、イデオロギー形成、問題のある社会現象などを見いだすために、テキストとテキストの産出・解釈の過程における社会的相互作用および社会的実践についての分析に力点を置くことが強調される。

まず、CDA 理論の提唱者のひとりである Norman Fairclough の理論的枠組みを取り上げる。Fairclough は、テキスト (text)、ディスコース実践 (discourse practice)、および社会文化的実践 (sociocultural practice) の3つの位相に分けてディスコース概念全体の考察を行っている。その枠組みは、言語テキストにおけるイデオロギー、権力関係、覇権支配を解釈するために強力な分析ツールを提供している (図2)。

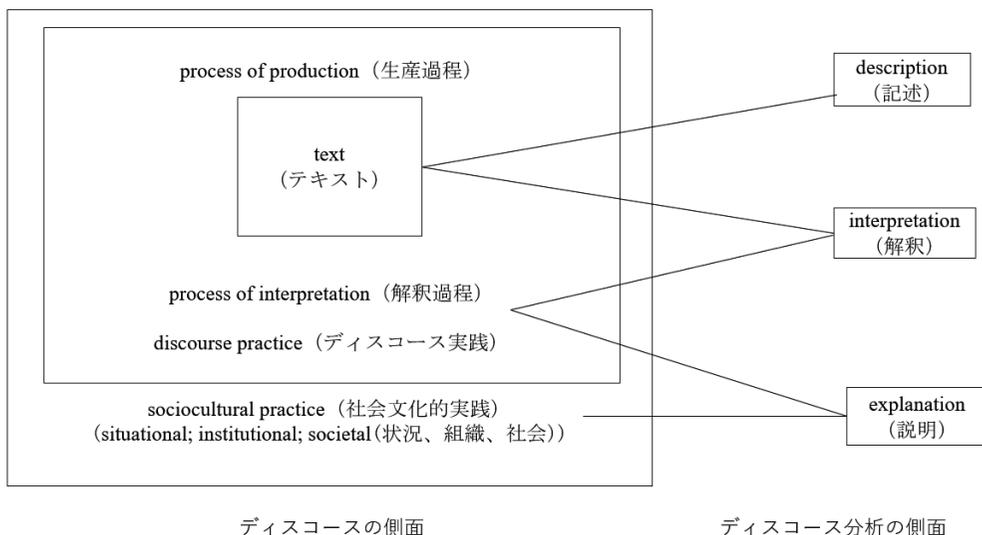


図2 Fairclough による CDA の枠組み (Fairclough 2010 : 133)

Fairclough の枠組みにおいて、テキストは言語学的視点から見た語彙、文法、意味に関する分析対象を指す。しかし、これまで述べてきたように、テレビドラマなどの映像メディアを対象にした研究は、言語という単一のモードだけでなく、画像テキストも含めてマルチモーダルなディスコースを考慮に入れる必要がある。Gunther Kress と Theo van Leeuwen は社会記号論を援用することでこの課題に取り組んだ。Kress と van Leeuwen は共著 *Reading Images* (2021) で、SFL を援用し、画像や動画といった視覚的なテキストに適用することを試みた (Kress and van Leeuwen [1996] 2021)。Kress と van Leeuwen は、画像分析が焦点化する要素として、表象的意味 (representational meaning)、相互行為的意味 (interactive meaning)、構成的意味 (compositional meaning) を挙げた。

表象的意味は、画像に描かれている人、場所、出来事間のコミュニケーションを表す。相互作用的意味は、テキストの中に表現された「参加者 (participants)」(Kress and van Leeuwen [1996] 2021 : 47) と、それを観る者の関係を指す。Kress と van Leeuwen に

よれば、空間的構成においてイメージの表象的意味と相互行為的意味を相互に関連づけている3つのシステムがある。すなわち情報価値 (information value)、顕示性 (salience)、フレーミング (framing) である (Kress and van Leeuwen [1996] 2021 : 181-182)。これらのシステムは、別個に作用するのではなく、相互に関連し合う。

Kress と van Leeuwen は、テキストの意味に関する探求の対象を言語から他の形式まで拡張し、画像の意味をより多層的に読み解く方法を提示している。しかし、それは記号資源の意味解釈までにとどまっており、テキストの社会性についての分析が不十分である。

以上の分析を踏まえ、現代の映像メディアを研究対象として、言語テキストと画像テキストという2つの異なるモードの組み合わせを視野に入れた MCDA のモデルを構築する (図3)。

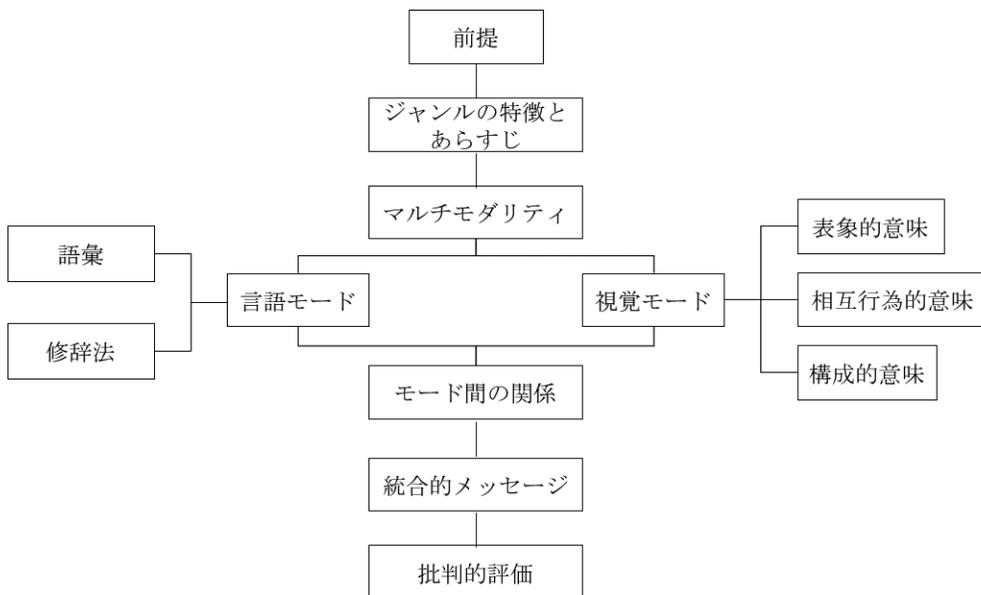


図3 映像メディアに対する MCDA のモデル⁶

具体的に言えば、MCDA においてはまず、テキストの時空間的・社会文化的なコンテキストを考察する。ジャンルはテキストの形式や内容に大きな影響を及ぼすため、「ジャンル・ルール (genre rules)」を知ることは欠かせない (Wodak and Meyer eds. 2016 =

⁶ 表象的意味、相互行為的意味、構成的意味は、筆者が Kress と van Leeuwen (2021) が提唱した社会記号論に基づいて位置づけた。そのほかの部分は CDA 理論と MCDA 理論の先行研究を踏まえて筆者が作成したものである。実際の分析ツールはそれぞれの課題やデータにあわせる必要がある。

2018: 280, 282)。各モードが、それぞれ異なる意味を含む場合もあれば、同様の意味を異なるモードで表現することも可能であるため、こうしたモードごとのさまざまな機能、モード間の違いや結びつきに注意しながら分析を行う。最後、さまざまなモードやその全体としての構成が、ディスコースに含まれている権力をどのように強化したり、対抗したり、隠蔽したりするのかを批判的に評価する。

従来の CDA と MDA では、単一モードに分析が限定されていた。マルチモーダルなテキストに対する分析でも、ひとつの記号資源を重んじる傾向がよく見られた。図 3 の MCDA のモデルにおいては、言語テキストと画像テキストが平等関係を持つ記号資源として分析が行われる。マルチモダリティの各モードは、排他的な関係にあるわけではなく、相互に意味を補い合う関係にある。しかし、往々にして異なるモダリティが均質化され同一視されてきた。図 3 のモデルに基づいて、異なるタイプの記号資源どうしが関係し合い結ばれている過程を解釈し、それぞれのテキストの意味とその他のテキストとの関連性を見つけ出す。

今までの MCDA の方法論は、テキスト内部の意味の解釈に主眼を置いており、見出された意味がどのような社会・文化的作用を有するのかという問いを枠組みの外に置いている。図 3 のモデルは、マクロな視点から社会文脈において、画像と言語のマルチモダリティに含まれているイデオロギーがどのように「常識」として正当化されるのかに注目する。

5. おわりに

MCDA は CDA と MDA を融合した学際的な研究手法であり、記号資源によって構築されたマルチモーダルな表象を分析し、そこに含まれているディスコースに含まれる権力関係とイデオロギーの傾向を明らかにしようとする。MCDA の発展のためは、CDA と MDA の対話を通して、科学的かつ体系的な理論枠組みに基づく研究方法を生み出すことが必要である。それは、既存の比較的成熟した研究方法と研究ツールを最適化し、統合することによって実現される。

本稿は、MCDA への主要なアプローチを提示し、現段階での到達点と問題点を概説した。先行研究を援用しつつ、映像メディアにおける言語と画像という 2 つの異なるモードの組み合わせに対する MCDA 分析の仮設的モデルを提示した。今後の課題として、図 3

のモデルの有効性を検証する必要がある。具体的には、(1)Machin と Wang の研究を含め、今まで構築されてきた MCDA に関する理論的枠組みと方法体系は図像テキストを対象にしたものであり、言語と図像の組み合わせのマルチモダリティに適応できるかどうかいまだに不明確である。(2)各モダリティと意味の間の関係性についての問題が解決されていない。Machin (2016) は、異なるアフォーダンスを持つ記号資源がどのように活用され、機能に基づく各記号モードの間の差異に注目するが、ある特定の意味を表すとき、異なるモダリティの間では、関連性および相補性 (張 2009)、あるいは平等関係 (Lascarides and Stone 2009) が存在するといった見方もある。(3)依然として社会文化的文脈についての方法的枠組みが不十分である。テキストの時空間的・社会文化的な要因に注意を払い、異なる文化の境界を越えた分析枠組みを作り上げていくことが求められている。

参考文献

- Chiapello, Emilia and Norman Fairclough, 2002, "Understanding the new management ideology: A transdisciplinary contribution from critical discourse analysis and new sociology of capitalism," *Discourse&Society*, 13 (2): 185-208.
- Chouliaraki, Lilie, 2006, *The Spectatorship of Suffering*, London: Sage.
- Djonov, Emilia and Sumin Zhao, 2014, "From multimodal to critical multimodal studies through popular discourse," Emilia Djonov and Sumin Zhao ed., *Critical Multimodal Studies of Popular Discourse*, New York: Routledge, 1-14.
- Fairclough, Norman, 2010, *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*, 2nd ed., Harlow: Longman.
- Hart, Christopher, 2016, "The visual basis of linguistic meaning and its implications for critical discourse studies: Integrating cognitive linguistic and multimodal methods," *Discourse&Society*, 27 (3): 335-350.
- Halliday, Michael A.K. and Christian M.I.M. Matthiessen, 2004, *An Introduction to Functional Grammar*, 3rd ed., London: Arnold.
- Kress, Gunther and Theo van Leeuwen, [1996] 2021, *Reading Images: the Grammar of Visual Design*, 3rd ed., London: Routledge.
- Lascarides, Alex and Matthew Stone, 2009, "Discourse coherence and gesture interpretation," *Gesture*, 9 (2): 147-180.
- Machin, David, 2013, "Introduction: What is Multimodal Critical Discourse Analysis," *CriticalDiscourse Studies*, 4 (10): 347-355.
- , 2016, "The need for a social and affordance-driven multimodal critical discourse studies," *Discourse & Society*, 27 (3): 322-334.
- Mcdonald, Edward, 2013, "Embodiment and meaning: moving beyond linguistic imperialism in social semiotics," *Social Semiotics*, 23 (3): 318-334.
- 野呂香代子, 2001, 「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み』三元社, 13-49.
- O'Halloran, Kay, 2004, *Multimodal Discourse Analysis*, London: Continuum.
- 桜井哲夫, 1996, 『フォーコー——知と権力』講談社.
- van Leeuwen, Theo, 2012, "Critical analysis of multimodal discourse," Carol A. Chapelle ed., *The*

- Encyclopedia of Applied Linguistics*, Oxford: Wiley-Blackwell, 1-5.
- Wang, Jiayu, 2014, "Criticising images: Critical discourse analysis of visual semiosis in picture news," *Critical Arts: South-North Cultural and Media Studies*, 28: 264-286.
- Wodak, Ruth and Michael Meyer eds., 2016, *Methods of Critical Discourse Studies*, 3rd ed., London: Sage. (野呂香代子・神田靖子・嶋津百代・高木佐知子・木部尚志・梅咲敦子・石部尚登・義永美
央子訳, 2018, 『批判的談話研究とは何か』三元社.)
- 伊藤守編, 2006, 『テレビニュースの社会学——マルチモダリティ分析の実践』世界思想社.
- 張徳祿, 2009, 「多模态话语分析综合理论框架」『中国外语』1: 24-30.
- 張徳祿, 2018, 「多模态话语中的情景语境」『解放军外国语学院学报』3: 1-9, 159.